〔惇信院殿御實記六〕延享四年九月廿八日、去し廿一日京にて御即位○桃園ありしかば、諸士出仕してその賀を申す、西城にもおなじ、また病にふすと、幼稚なると、在國のやからは、宿老に使札もて慶賀きこえ奉る、　十月二日、三家酒樽肴さゝげられ御即位を賀し奉り、五萬石幷に四位以上よりもおなじくさゝげて賀し奉る、

〔浚明院殿御實記二十三〕明和八年五月十三日、御即位○後桃園はてしかば、日門隨門に、高家戸田土佐守氏明御使して賀せらる、

〔浚明院殿御實記四十三〕安永九年十二月十一日、こたび京にて主上○光格御即位ありしにより、群臣出仕して賀し奉る、　十三日、此日日門幷隨宜樂院のもとに、高家由良信濃守貞通御使して、京の御即位を賀せらる、

〔皇年代略記後圓融〕應安四年辛亥三月廿三日、父帝後光嚴先退本宮、幸忠光卿室町亭、被行親王冠禮幷讓國之儀、同七年十二月廿八日己未即位、○略節

〔大外記師夏記〕應安七年十二月廿八日、御即位也、依神木在洛、自御讓位至于當四ヶ年延引、官廳行幸、仍爲當日行幸議也、

〔實隆公記〕文龜三年十月六日乙亥、於御前有被仰下事、御即位○後柏原延引之事無其儀、當代も御晩遲之間、每事歎思召之子細等被仰下、種々奉慰之、有申入旨等、不能記也、

〔宣胤卿記〕永正元年四月廿一日辛巳、今日於室町殿有松拍子云々、朝倉彈正左衞門尉貞景自越前國上用脚千貫餘沙汰之、觀世大夫一座凝風情許也、抑御即位依無用脚、經年不被行、每月猿樂、今日殊嚴重、爲之如何、

〔續史愚抄後柏原〕永正十六年十月十日辛未、今日武家言、御即位用途不調者、可有延引、　十七年七月十八日癸酉、來月廿七日即位被治定、非日時定、密議也、　八月十日乙未、來廿七日即位事又延引、可爲十

踐祚後久不即位